

国際交流学科 3年

留学先：フランス・西部カトリック大学

留学期間：2023年2月～2024年1月

留学期間は語学の上達を最優先事項として最も力を注ぎました。

私は一年間の留学を通して様々な縁と巡り合うことができました。留学当初は、相手と同じ言語を勉強していたとしても同等の水準に達しておらず、会話や意思疎通がままならないため、信頼を寄せることや距離を縮めることは容易ではありませんでした。自身が思い描くような理想と実際の現実とは大差が生じ、なかなか思うように事が運ばず、留学の際に一番の仇となる言語の壁を目の当たりにしました。そうした中でフランス語を使って会話することが億劫になることも多々あり、英語に逃げってしまうことも少なからずありました。春学期中は、ホストファミリーともいわゆる第二の家族というような関係性には残念ながら至ることができませんでした。一方で、日々朝から晩までフランス語に囲まれ、平日は語学習得に特化した生活を送っていると、自分でも知らないうちに自動的に語学の上達がされるようです。特にこれといった大きな実感を得られた経験は春学期中にはありませんでしたが、秋学期のクラス分けテストでは、春学期に所属していたクラスよりも、一回りも二回りも上のクラスに所属することができました。

秋学期は、ホストファミリーに恵まれ、一緒に過ごす時間が生活の中で大部分を占め、積極的に会話をすることができました。教科書以上の学習につながり、ホストファミリーと一緒に話せば話す分だけ、文法も語彙も聞く能力も理解する能力も格段に上がりました。相手と同じ言語を操れるようになり会話が弾むと、やはり仲良くなることも容易になり、そのホストファミリーとは本当の親子のような関係性に至っています。

この経験を通して、言語習得は人間関係を築く一番の鍵であることを学びました。話せるようになると自信も身に付き、能動的に行動できるようになり、さらに様々なことにも挑戦できるようになりました。おかげで多くのフランス文化を体験することができ、とても充実した留学生活を送ることができました。

よく語学習得はコミュニケーションツールの一環で、世界中の人と仲良くなれる手段とされていますが、まさにその通りで、この留学を通して出会えた様々な縁とは、言語習得によって最上の関係性を築くことができました。語学学習に勤しみ、語学上達の恩恵をこうした形で受け取ることができたため、心の底から留学をして良かったなど実感しており、かつ人生で最も素敵な思い出になりました。